

〈講演会報告〉

「日常診療に役立つ漢方の知識」

医療法人社団慶友会吉田病院

鈴木 まゆみ

旭川市医師会女性医師部会研修会が、平成20年2月14日(木)旭川グランドホテルにおいて開催されました。今回は、北里研究所東洋医学総合研究所漢方診療部長、村主明彦先生による「日常診療に役立つ漢方の知識」と題してご講演頂きました。

村主先生が勤務されている北里研究所の施設案内と診察風景のビデオ上映の後、香蘇散を試飲しながら聴講しました。講演内容は、漢方の基本的概念から診断及び治療総論について幅広い内容でしたが、大変わかりやすいご講演でした。

漢方医学とは、中国系伝統医学が日本に伝えられ独自に発展してきた医学で、身体全体の調和を図ることを目標とします。「随証治療」という治療概念があり、「証」に随って治療を行います。「証」は、生体の陰陽・虚実・寒熱・表裏・気血水・五臓・六病位や漢方独自の診察方法（四診＝望診・聞診・問診・切診）等から決まり、処方を決定します。また、処方には、攻める薬と守る薬があり、証に合わせて使い分ける必要があります。

漢方医学には未病という概念があり、『素問』『靈樞』などの古医書には、「上区は未病を治し、已病を治さず」と記載があります。上区とは、上級の医者すなわち名医のことで、「未病を治す」とは「未だ病ならざるものを治す」ということで、養生も含め、症状が現れて病気になる前に予防したり、わずかな異常をとらえて治療するという意味のほか、すでに何らかの症状を認めたり、発病していても、それがさらに進行したり、他の臓器に及ぶことを防ぐような治療を行うという意味があります。

漢方薬の副作用としては、稀なものとして間質性肺炎、比較的多いものとして肝機能障害、胃腸障害、皮膚障害等を挙げられました。特に黄芩含有の処方については注意が必要です。

また麻黄による血圧上昇、動悸、尿閉等の副作用

や甘草による低カリウム血症、血圧上昇、浮腫、脱力感等にも注意が必要です。

また、高齢者には補剤による漢方治療の適応が多いと述べられました。ポイントは、①老化予防・抗病力の賦活、②消化吸収力・免疫賦活作用の強化の2つを挙げられ、その目的として、生体のホメオスタシスの乱れを是正し、QOLの維持及び向上を図ることにあります。

最後に、村主先生のお勧め処方をいくつか挙げてみます。風邪には葛根湯とよく言いますが、中高年の風邪には麻黄含有の葛根湯よりも香蘇散の方が安全性が高いそうです。香蘇散は風邪のごく初期に服用させるのがよいそうです。紫蘇の香りがして、味も飲みやすかったです。加味逍遙散タイプの呼吸器症状には滋陰至宝湯、頭痛の風邪には川芎茶調散、喉の痛みには桔梗湯を湯に溶いてうがいしながら服用するとよいそうです。妊娠中の風邪には麻黄を含まない処方（香蘇散等）がよいそうです。体力の無い人の風邪、老人などには桂枝湯もよいそうですが、シナモンが苦手な人は香蘇散の方がよいでしょう。寒気が強い風邪の場合、麻黄が使える症例ならば麻黄附子細辛湯も切れ味のよい処方の一つだそうです。感冒後に咳が長引いた時には、麦門冬湯や竹茹温胆湯等が使われます。麦門冬湯は、発作性の乾性咳嗽、咽喉頭の乾燥感を伴う症例によいとされ、竹茹温胆湯は、夜間に咳や痰で不眠になる症例によいとされます。こじらせた風邪には柴胡剤（証に合わせて処方を選択）を用います。このように風邪薬ひとつをとっても、漢方治療は、病気の時期や証、症状等により処方が変わってきます。漢方で風邪を治せるようになれば一人前と言われますが、漢方治療は奥が深く難解な反面、治療に醍醐味を感じる医学だと思えます。